人文地理学研究　XXIII　39～58　1999

金村別雷神社信仰の地域的特性

松　井　圭　介

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　雷神信仰と金村別雷神社
Ⅲ　金村別雷神社の信仰形態
　Ⅲ－1　共同祈願の形態
　Ⅲ－2　個人祈願の形態
　Ⅲ－3　金村別雷神社の氏子地域
Ⅳ　金村信仰圏の地域区分
　Ⅳ－1　金村講の分布
　Ⅳ－2　個人崇敬者の分布
　Ⅳ－3　信仰圏の地域区分
Ⅴ　おわりに

キーワード：雷神信仰，金村別雷神社，金村講，個人崇敬者，信仰圏

Ⅰ　はじめに

近年，地理学や民俗学の分野で信仰圏に関する論考が数多く報告されている．1990年代以降のものに限定しても，戸隠山（岩鼻，1992），岩木山（小山，1995；金子，1997），笠間稲荷（松井，1995）などの事例研究が蓄積されている．また，日本における山岳信仰圏研究の動向を俯瞰した論文（金子，1995）もみられるなど，信仰圏に関する研究は，巡礼研究とともに，現代日本の宗教地理学の分野において，活発に研究がなされている分野といえる．

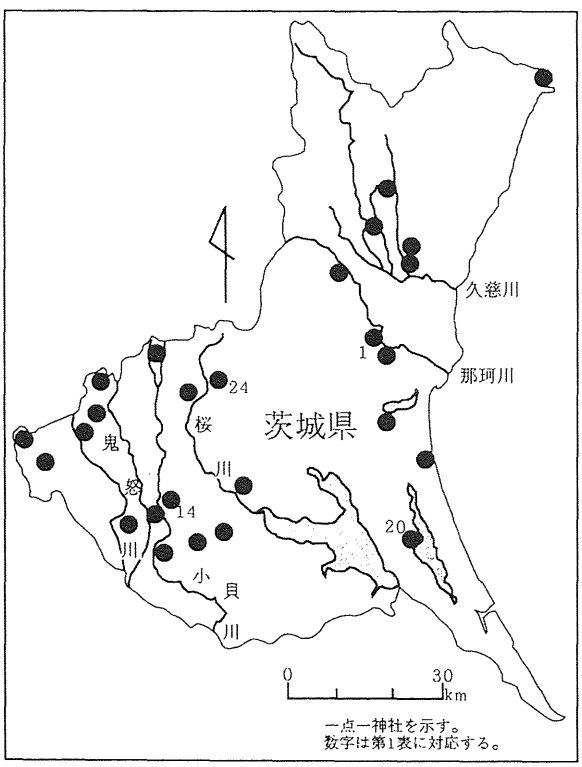
本論文では，茨城県南西部から埼玉県南東部にかけての農村部の集落において，講が組織され，農業神，雷神として多くの参拝者を集めている金村別雷神社（茨城県つくば市）の信仰圏を分析し，既往の研究において解明されてきた山岳宗教の信仰圏と比較することによって，その空間的特性の共通点および差異を明らかにすることを目的とする．本稿では以下の手順で分析を進める．まず茨城県における雷神信仰の事例を概観した後，金村別雷神社の立地と沿革について述べる（Ⅱ章）．続いて金村別雷神社の信仰形態を，共同祈願と個人祈願の二側面から分析する（Ⅲ章）．そしてそれぞれの表出形態である講社と個人崇敬者の分布状況を把握し，金村信仰圏の地域区分を画定する（Ⅳ章）．最後に，本稿で得られた金村信仰圏を従来の研究の成果と比較し，その空間的特性を考察する（Ⅴ章）．本調査の際には，金村別雷神社社務所所蔵の資料を閲覧し，講社台帳および個人参拝記録を筆写させていただいた．これらに加えて，御神殿屋根修繕費芳名額や各講社による奉納物，講碑などを資料として利用した．

Ⅱ　雷神信仰と金村別雷神社

本章では，金村別雷神社とその信仰の基盤である雷神信仰について述べる．雷は恐ろしいものとして畏怖される反面，水神として，また天の神に根源する火を雷光によって運搬する神の子としても尊

崇の対象とされてきた（田村，1972）．すなわち雷神信仰は，農作物や家屋に被害を与える雹雷を司る神に対する信仰であると同時に，恵みの雷雨をもたらす神として信仰され，広く農村社会に浸透していった．また荒ぶる神として災厄をもたらす雷神は，御霊信仰とも重層化し，北野天神の原像が，疫神，怨霊神とともに雷雨神としての性格を帯びていたことが指摘されている（田村，1972；上田，1988）．柳田（1969）は，関東の平野部で落雷があったときに，その落雷した区域に直ちに青竹を立て注連を張っておくと，その竹を伝って雷獣が再び天上する話や，雷神が地に落ちて童子となり，農夫に養われた結果，その農夫の田ばかりには思いのままに雨が降ったという話を引用し，稲田に降り来たっておおいに崇敬される雷の姿を，雷神信仰の原初形態として捉えている．

雷雨及び落雷多発地域である北関東地方には，雷を冠した神社が多く分布していることが知られている（倉林ほか，1971）．これらの神社は雷神社，雷電神社，火雷神社，別雷神社などの名称で呼ばれているのが通例である．このうちで，茨城県における雷神社の分布を示したのが第１図及び第１表である．ここでいう雷神社とは，神社の名称の一部に雷が含まれているものを指す．これによると茨城県内にある宗教法人格を有する雷神社は26社である．このうち郷社に列せられているのは，金村別雷神社１社であり，その他の神社は，村社（12社）もしくは無格社（13社）である．雷神社の大半



第１図　茨城県における雷神社の分布（1989年）
（茨城県宗教法人名簿より作成）

第１表　茨城県の雷神社（1989年）

番号	所在地	神社名	祭神※	社格
1	水戸市元山町	別雷皇太神	2	村社
2	水戸市泉町	水雷稲荷神社	3	無格社
3	古河市雷電町	雷電神社	1	無格社
4	下館市樋口	雷神社	1	村社
5	結城市結城	雷電神社	1	村社
6	結城市大木	雷神社	1	無格社
7	水海道市福二町	雷神社	1	村社
8	常陸太田市藤田町	雷神社	1	村社
9	常陸太田市西三町	雷神社	1	無格社
10	北茨城市平潟町	雷神社	1	無格社
11	岩井市神田山	雷水神社	1	無格社
12	つくば市根崎	雷水神社	1	無格社
13	つくば市稲岡	雷神社	1	村社
14	つくば市上郷	金村別雷神社	1	郷社
15	茨城町網掛	神明雷神社	3	村社
16	桂村粟	雷神社	1	無格社
17	金砂郷村上利員	別雷皇太神社	3	無格社
18	水府村和久	雷神社	1	無格社
19	鉾田町柏熊	雷神社	1	無格社
20	麻生町岡	雷神社	1	村社
21	新治村藤沢新田	別雷神社	1	無格社
22	谷和原村鬼長	雷神社	1	村社
23	真壁町細芝	雷電神社	1	村社
24	大和村大曽根	雷神社	1	村社
25	総和町磯部	雷電神社	2	無格社
26	三和町諸川新田	雷神社	1	村社

（茨城県宗教法人名簿より作成）

※祭神のうち，１は別雷神，２はその他の雷神，３は非雷神を祀っていることを示す。

（21社）は別雷神を唯一の祭神としている[1]．金村別雷神社（番号14）や別雷皇太神（番号１）のように，京都の賀茂別雷（上賀茂）神社からの勧請に縁起を持つ神社や，大和村大曽根の雷神社（番号24）のように，鹿島神宮からの勧請社もみられる．茨城県内の雷神社の分布に関する歴史的な経緯は，不明の神社が多いが，落雷の被害にあった場所に雷神社が建立され，雷神として祀られる場合がある[2]．落雷が祀られる習俗の例としては，例えば，筑波郡地方では，雷が田畑に落ちると，落雷の場所に竹を四本立てて注連縄を張り，「拝み屋さん」に依頼して地祭りを行う．これを「アトマツリ」といい，落雷の場所は作物が枯れてしまい不作となるので，二度と落ちないためにアトマツリを行うという習俗がみられる（井之口，1985）．また同郡でも別の地域では，これとは反対に，田畑で落雷のあった場所は，神の降臨した場所であり，土地が豊かになるとする地域もある．いずれの事例にせよ，落雷のあった場所には，注連縄が張られ聖域として祀られた．

次に雷神社が立地している場所の自然的基盤を検討する．第１図からわかるように，雷神社の立地には明瞭な傾向が読みとれる．まず第一には，県南西部の鬼怒川，小貝川，桜川流域と県中央部から北部にかけての，那珂川，久慈川流域に分布の集積がみられることである．茨城県南西部と中央部から北部にかけての各主要河川流域は，落雷の常襲地域であり（吉野・宮内・岩間，1987；吉野・宮内，1987），雷神社もこの落雷多発地域に分布の中心がある．第二には，雷神社は，河川や湖沼の自然堤防上の微高地や，氾濫原に立地する傾向が強いことである．このことは，雷神社に対する信仰が，水を司る水神としての機能性を高く有し，避雷・除災の神であると同時に，雷神の持つ龍神としてのイメージや，雷がもたらす降雨への祈願が投影されているものと推察される．

金村別雷神社は，つくば市の西端，旧豊里町の上郷地区に鎮座する旧郷社格を持つ神社である（第１図，番号14）．931（承平元）年，豊田家初代領主将基によって，京都・上賀茂神社の分霊を勧請して創建されたものとされている．金村別雷神社は，小貝川が形成した沖積低地の氾濫原に立地している（写真１）．標高は約14m である．この小貝川は，古来より河道の定まらない暴れ川で，一度大雨が降れば，付近の沖積低地を乱流し，大きな水害をしばしばもたらしてきた．河川沿岸地域には洪水の特徴的な地形である河跡沼が残っている．しかし伝承によると，いかなる激しい洪水が発生した際にも，金村別雷神社の境内地は冠水することがなかったとされている（串田，1978）．

金村別雷神社は，金村様や雷様と呼ばれ，創建以来，五穀豊穣をもたらす農業神として地元住民の崇敬を集めてきた．金村別雷神社は関東三雷神[3]の一つとして，信仰圏は氏子地域を越えて，広く関東地方に広がっている．これに呼応して，金村別雷神社に寄せられる信仰も多様であり，五穀豊穣祈願や雹雷除けを始めとし，家内安全，無病息災の神としても信仰されている（豊里町史編纂委員会，1985）．このように金村別雷神社は，崇敬祈願社として勧請された社歴を有し，雷神としての御利益を通して関東地方の農村部に広く信仰が受容されている．

Ⅲ　金村別雷神社の信仰形態

Ⅲ－１　共同祈願の形態

祈願とは，目的達成のために神や超自然的存在の力に依存，あるいはその力を作用させようとする

ことである（宮本，1994）．祈願をその信仰の主体者に着目すると，個人祈願と共同祈願に分類することができる．祈願の手段（方法）としては，金村信仰の場合，参拝および奉納が一般的である．

共同祈願とは，村落の構成員が共同して災難を防ぐため神仏に祈願する呪術的行為である（宮田，1994a）．共同祈願としては，雨乞い，虫送り，道切り，疾病送り，風祭りなどが代表的な習俗としてあげられる．共同祈願の主体は，村落共同体の構成員すべてであり，祈願内容も共同体全体の共通利害に基づいたものである．金村別雷神社に対する共同祈願の手段としては，講の形式がとられるのが一般的である．

金村講の起源は定かではないが，近世後期から明治期にかけて成立してきたものと推測される．金村講は，地縁的な集落を単位に組織されるのが通例である．金村講には以下のように４種類ある．

1）太々講…春秋の大祭[4]時に太々神楽の奉納を行う講である（写真２）．元来は年に２回の大祭に参拝する講であったが，現在では春か秋のどちらか１回に参拝する講が増加している．代参講の組織であり，代参人には講中で祀る大木札と講員の人数分の中札（神棚用）および田畑に祀る雹虫除札（春大祭時）や感謝祭小札（秋大祭時）が授与される．金村別雷神社の講の中では最も歴史が古く，江戸時代後期から明治期にかけて起源を有する講が多数を占める．

2）祈年講…正月に新年の祈願を行う講である．現在では元旦祭[5]で御祈祷を行った講員分の札を，講の世話人宛てに郵送する形式が採用されている．太々講であった従前の講が，講員における農家の減少に伴う参拝意欲の低下などから，祈年講へと変化した講もある．また集落によっては，正月だけは祈年講の形態をとり，春秋の季節には太々講として参拝を行う講もある．

3）日月年参講…日参り，月参り，年参りを行う講である．日参講は現在では組織されていない．月参講は通常，３～９月の７か月にわたり，月に１回代参人が神社に参拝を行う講である．現在では簡略化され，初月（４月）と終月（９月）の２回の参拝で済ませる場合もある．年参講は年１回神社に代参する講で，日月年参講のうち95％がこの年参講である．参拝時期は講により異なるが，３月，４月もしくは９月，10月に参拝する講が一般的である．講により授与品は異なるが，郷中安全を祈願する箱札や大木札，辻札とされる大札，田畑に祀る雹虫除札が授与される．

4）春秋団体講…春秋団体講は，主として４月か11月に，金村別雷神社へ講員の総参りを行う講である．参拝時期に応じて春団体講，秋団体講と呼ばれる．自発的に組織された講（神社団体講）は相対的に古く，江戸後期から継続する講もある．しかし春秋団体講には，第二次世界大戦前後に，神社側の教化活動により，結成された講も多く，第二次世界大戦後に結成された講の多くは，総参りを行わず代参講の形式がとられている．

金村別雷神社に対する祈願のうち代表的なものとして，降雨祈願（雨乞い），雹虫除け，道切りがある．降雨祈願は，金村別雷神社の御利益のなかでも最も重要なものである．降雨祈願の具体的な内容を，茨城県八千代町尾崎地区を事例として以下に説明する．

尾崎地区は洪積台地上に立地し，標高は約25m である．集落の北部から南部にかけて，舌状に台地が延び，東西を飯沼川の支谷が刻んでいる畑作農業地域である．この地区での金村別雷神社への信仰は，「雨乞い信心」が根幹である．世話人が１～２尺の竹筒を持って金村別雷神社に向かい，神社に

着くと神官より御祓いを受け，神社の神水と神札を授かり，帰途につく（写真３）．地区では人々が，留守の間に煮付けや赤飯を炊いて，世話人たちの帰りを待つ．世話人一行が姿を見せると太鼓をうち鳴らし，地区内にその帰りを知らせる．人々が勢揃いしたところで，世話人は迎えてきた霊水を，地区内の田畑や辻々に祈りの言葉とともに流して歩く．全部流し終わると，地区の東を流れる用水路に入り，雨乞いの祈りをしながら，相互に水をかけ合って雨乞い信心の行事が終了する．会食後に解散する．雨乞い信心のかいがあって，雨が降ったときは，「礼信心」を行う．これは太鼓をうち鳴らし，降雨を神に感謝する祈りを捧げるものである．この時の雨水を「お返し水」といって後日，金村別雷神社へ持参する（八千代町史編纂委員会，1987）．

降雨を支配する雷神である金村別雷神社への信仰は，このような降雨祈願という形で各地に受容されていった．現在ではご祈祷としての降雨祈願は行われていないが[6]，祈雨信仰に基づく五穀豊穣祈願という形で各地の講は継続されている．

雹虫除けは，主として太々講が組織されている集落において，祈願がなされている．雹除けは，夏から秋にかけての収穫期に，雹雨や落雷による作物への被害を防ぐための祈願である．虫除けは作物の虫害防除の祈願である．春大祭においてご祈祷を受けた雹虫除け札を田畑の入口や角に祀り，作物の豊饒を祈念するものである．虫除けの場合，特に稲の播種期と収穫期における虫害に対する農家の不安が信仰の基盤となった．

道切りは，主として日月年参講が組織されている集落において行われる行事であり，疫病のような災厄が集落内に入ることを防ぐための祈願である．集落の入口の辻に金村別雷神社の神札（大札[7]）を立てるのが通常である（写真４）．

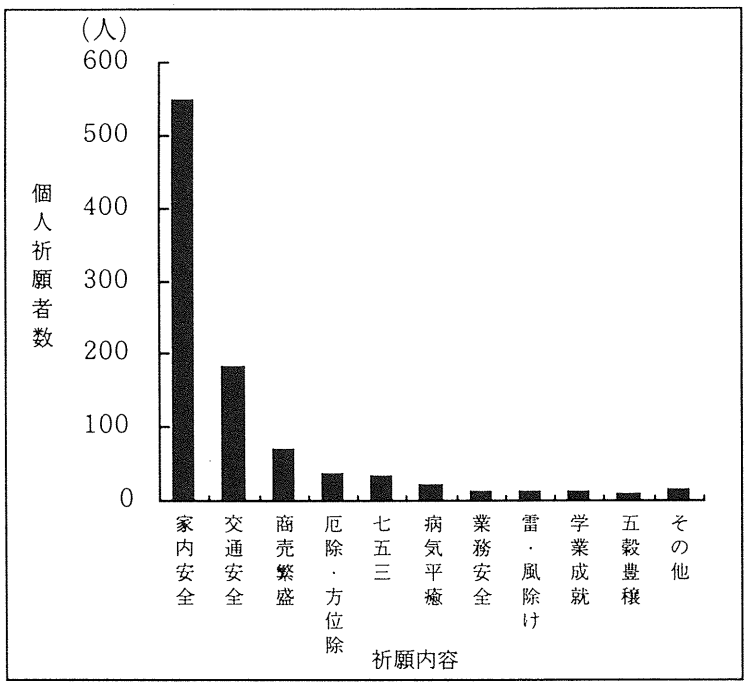
Ⅲ－２　個人祈願の形態

共同祈願が集落の構成員全体に関わる問題の解決のために行われる祈願であるのに対して，個人祈願は，招福や治病などの個人的な願いに基づいてなされる祈願である（宮田，1994b）．一般に個人祈願の形態は共同祈願よりさらに多様であり，病気平癒をはじめ，家業・商売繁盛，開運・増福，火難・盗難除，懐胎・安産など多岐にわたる（宮本，1994）．

第２図は1995（平成７）年度における金村別雷神社の個人祈願者[8]のうち，祈願内容が記録されている945人についての祈願内容を示したものである．本図からわかるとおり，家内安全が547人と全体の57.9％を占めている．次いで交通安全が182人（19.3％），商売繁盛が70人（7.4％）となっている．金村別雷神社の御利益に基づく祈願である雷・風除け祈願は11人（1.2％）に過ぎない．農家による雷除け祈願の他に，電力会社による落雷鎮火祈願もある（写真５）．

Ⅲ－３　金村別雷神社の氏子地域

金村別雷神社の氏子地域は，旧藩政村の上郷（かみごう），手子生（てごまる），木俣（このまた），野畑（のばた）にあたる．この４つの旧村が29の地区に分けられ，各地区から氏子世話人が１～３人選出されている．秋大祭の際には，各地区から代参者が選ばれ，神社に新穀の奉納や感謝の祈



第2図　金村別雷神社・個人祈願者の祈願内容（1995年度）
（金村別雷神社社務所資料より作成）

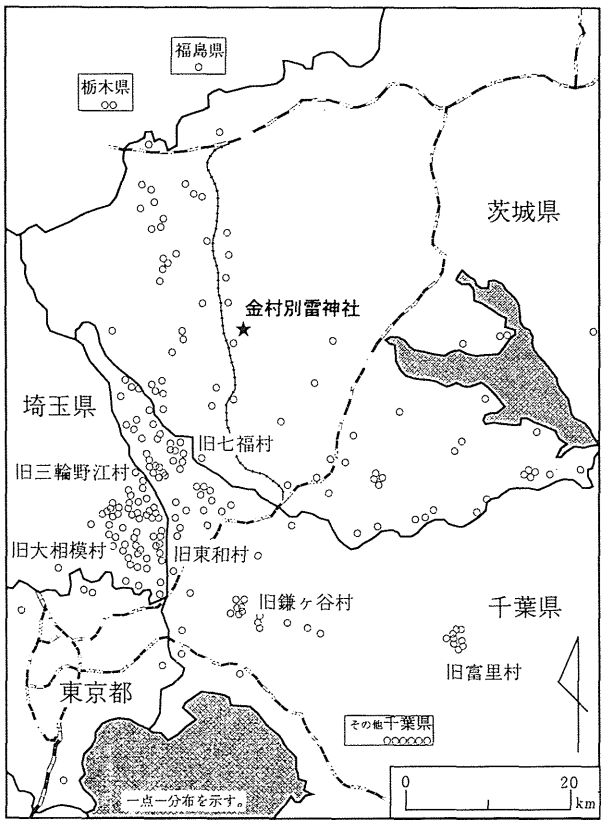
願が行われる．大祭では，稚児舞の奉納が行われるが，大巫女（小学校高学年），小巫女（小学校低学年）は，雷神地区から選ばれるのが慣例である．雷神地区は1960年代まで金村別雷神社の鳥居前町を形成する地区であった．小貝川の改修工事により堤防内の神社から堤防脇の小貝川左岸に集落全体が移転した．この際に土産物屋や宿泊所は廃業し，神社との経済的な関連は消滅したが，祭礼の際の裏方業務は現在でも当地区の人々が担っている（写真6）．

Ⅳ　金村信仰圏の地域区分

Ⅳ－1　金村講の分布

第3図は1949（昭和24）年における金村講のうち，郵便祈年講[9]の分布を示したものである．ここに示した講は，神社に奉納寄進を行った講であり，当時活動していた講であると考えられる．金村講の分布は1都5県にわたり，合計218講を確認した．都県別では，千葉県の81講が最多であり，以下茨城県に73講，埼玉県に56講あり，この3県で全体の96％以上を占めた．分布の中心は，金村別雷神社から南西方向の千葉県北西部および埼玉県南東部にある．神社の北東方向では，講が組織されている集落が少ないことがわかる．最も遠い講は福島県郡山市にあり，これを含めると信仰圏は神社を中心に150km にまで及んでいる．

1949年における金村講の分布を当時の市町村別に集計すると，埼玉県北葛飾郡三輪野江村（現吉川市）の11講が最多である．以下千葉県印旛郡富里村（現富里村）の9講，同東葛飾郡七福村（現野田



第3図　金村別雷神社・郵便祈年講の分布（1949年）
（御神殿屋根修繕費芳名額より作成）

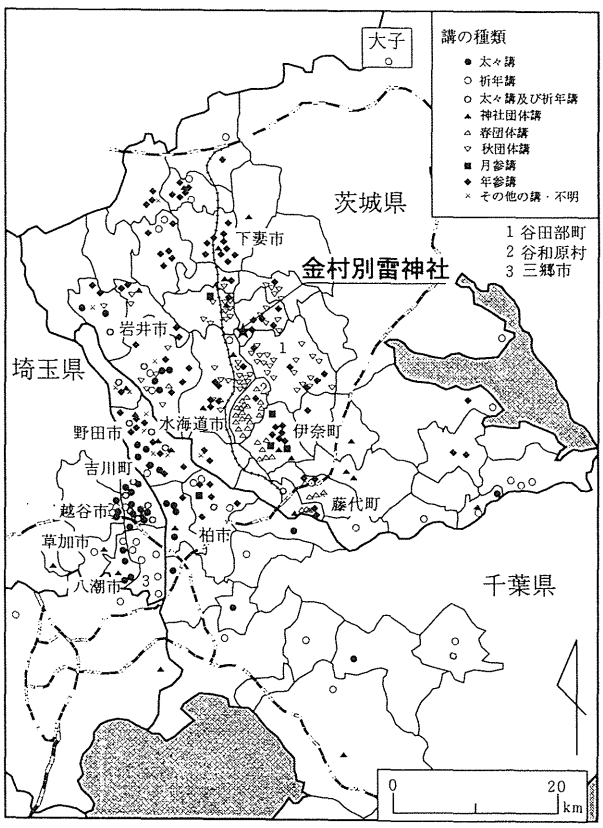
市）と埼玉県南埼玉郡大相模村（現越谷市）の8講，同北葛飾郡東和村（現三郷市）と千葉県東葛飾郡鎌ヶ谷村（現鎌ヶ谷市）が7講で続いている[10]．これらの分布傾向により，金村別雷神社から南西20～40kmの下総台地北西部や中川沿いの低地に立地する集落において，金村講が組織されていたことがわかる．

下総台地の北西部の集落には，明治期以降の開拓村が多く分布するが，金村講はこのような集落でも組織されている．例えば初富地区（鎌ヶ谷村）は，小金中野牧を開墾して1869（明治2）年に成立した村である．開墾当初の不慣れさとその後の天候不順による連年の不作が伝承されており，1873（明治6）年には開拓の祈願を込めて豊作稲荷神社が建立されている．初富地区では，金村講以外にも富士講（富士浅間神社）や古峰講（古峰神社），三峰講（三峰神社），成田講（成田山新勝寺），女化講（女化神社）などの各種講が存在していたことや多くの年中行事があったことが報告されている（鎌ヶ谷市郷土資料館，1993）．初富地区以外でも，下総台地北西部の小金牧の開拓による豊四季村，十余二村（いずれも現柏市）をはじめ，明治期以降の開拓集落では，土地条件の悪さや旧士族の農業への不慣れなどもあって収穫が不安定であり，さまざまな社寺に御利益を求めて参詣する代参講が組織されていた．金村講も雨乞いの神として御利益が求められ，講が組織されたものと考えられる．

第４図は1985（昭和60）年の講社名簿に基づく金村講の分布をその種類別に示したものである[11]．講は１都３県の320の集落において組織されていた．都県別にみると茨城県が221講と最多であり，全体の69.1％を占めた．次いで千葉県が58講（18.1％），埼玉県が38講（11.9％）となっている．市町村別では，千葉県野田市と茨城県谷田部町（現つくば市）の26講が最多であり，次いで茨城県水海道市の24講，谷和原村の20講などとなっている．

講種別にみると団体講が124講（35.8％）で最も多く，日月年参講が104講（30.1％），祈年講が63講（18.2％），太々講が54講（15.6％）である[12]．講種別に金村講の地域的広がりをみると以下のように整理することができる．団体講は90％以上が茨城県に集積している．特に春団体講と秋団体講はすべてが金村別雷神社に近接する茨城県内に分布している．春団体講は谷和原村と伊奈町，藤代町を中心とした小貝川下流域に分布の中心があり，秋団体講は谷田部町，水海道市を中心とする神社の近隣地域に集積している[13]．

太々講と祈年講の分布の中心は，埼玉県南東部から千葉県北部にかけての地域にある．埼玉県に分布する講の約90％は太々講もしくは祈年講である．特に吉川町（現吉川市），越谷市，八潮市，三郷市の中川下流域に位置する地域に太々講，祈年講が組織されている．千葉県，茨城県においても神社

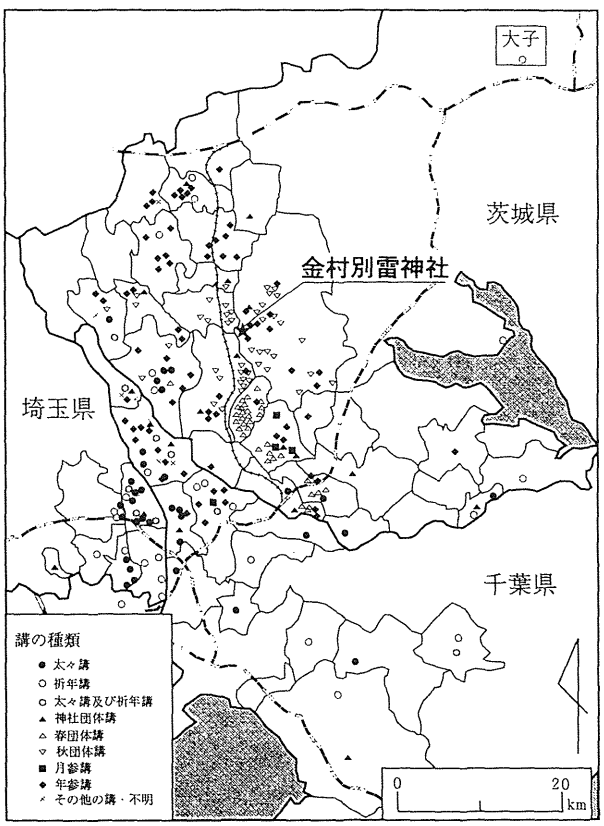


第４図　金村講の分布（1985年）
（金村別雷神社社務所資料より作成）

から30km 以上の遠隔に位置する市町村では，太々講，祈年講の比率が高くなっている．

日月年参講の分布は，金村別雷神社を中心に半径20km の圏内に集積している．埼玉県には分布がみられず，神社の近隣地域である茨城県西部の下妻市，水海道市，岩井市，神社の立地する豊里町（現つくば市），谷田部町や千葉県北西部の野田市，柏市などに主に分布している．これは日月年参講の起源が祈雨祈祷にあることに関連している．灌漑をはじめとする農業技術水準が低かった第二次世界大戦以前には，洪積台地上の集落では，特に農業用水の確保が困難であった．日月年参講は，集落の代表者が金村別雷神社に参り，祈雨祈祷を受けた後，神水をいただいて集落に帰り，雨乞い祈願をすることが信仰の基幹である．当時の交通手段は徒歩もしくは自転車であり，徒歩半日圏が日月年参講の分布と一致する．日月年参講の分布はセクターによる差異が小さく，他講の分布が疎である神社の北方セクターにも日月年参講は組織されている．

第５図は1995年現在における金村講の講種別分布である[14]．1985年と同じく１都３県に分布しているが，講が組織されている集落数は254であり，同年と比較して11％以上減少している．東京都では３講あったものが１講のみとなり[15]，埼玉県では講数が26％も減少している．講の減少傾向は1949年の分布図と比較するとさらに明瞭であり，特に埼玉県から千葉県にかけての都市化が急速に進展した



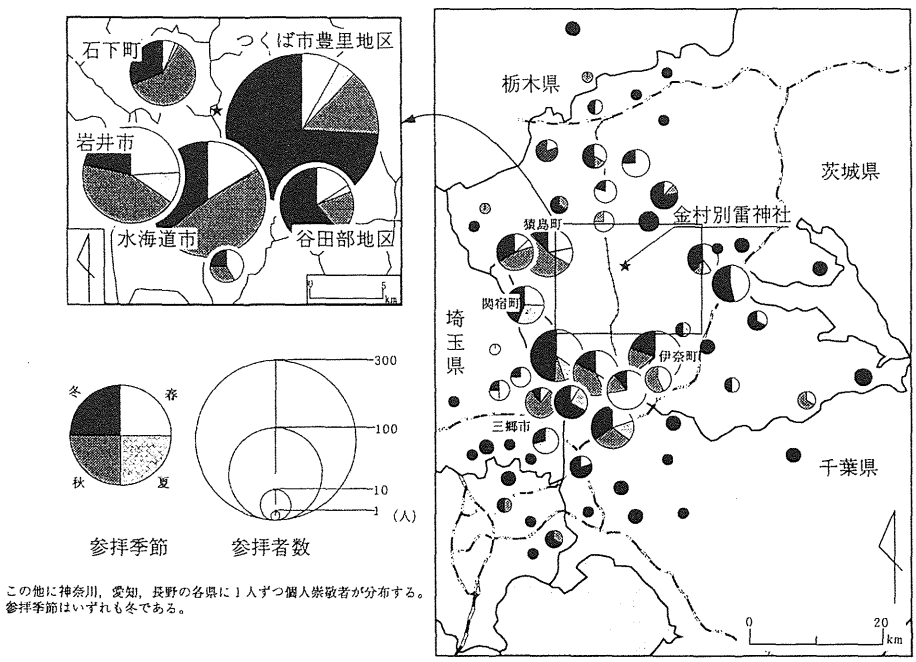
第５図　金村講の分布（1995年）
（金村別雷神社社務所資料より作成）

地域において減少傾向が強くみられる．

第５図より1995年における金村講の分布は，神社の南部，西部方向に密であり，概ね半径10～30km に分布していることがわかる．最も遠方の講は神社から50km 離れたところにある．それより遠隔の地域では講は組織されていない[16]．神社の北部方向に講がほとんど組織されていないのは，そこには筑波山をはじめとする八溝・吾国山系の山地があり，交通の利便性が低いこと[17]や同様の御利益を有する水戸にある別雷皇太神の信仰圏と重複すること，さらには神社側の教化活動が行われなかったことが要因として考えられる．同様に茨城県西部の古河市から埼玉県東部の春日部市にかけては，群馬県板倉町にある板倉雷電神社への信仰が盛んな地域であり，金村講は組織されていない．

Ⅳ－２　個人崇敬者の分布

第６図は1995年４月１日～1996年３月31日の１年間に，金村別雷神社で祈祷を受けた人（法人を含む，以下個人崇敬者と表現する）の分布を参拝季節別に示したものである[18]．この１年間に延べ1,031人が祈願を行っている[19]．個人崇敬者の分布は１都７県（茨城，千葉，埼玉，東京，栃木，神奈川，愛知，長野）にわたっている．このうち茨城県内に居住する個人祈願者が878人であり，85.2％を占めている．地域別にみると金村別雷神社の位置するつくば市豊里地区が273人と最多であり，以下水海道市の155人，岩井市の107人，つくば市谷田部地区の62人の順となっている．つくば市豊里地区の場合，氏子地域に居住する個人祈願者が182人と当地区全体の66.7％を占めている．このように個人崇敬者の分布は，講の分布とは異なり，金村別雷神社の氏子地域を中心とする近隣地域で卓越し，信仰



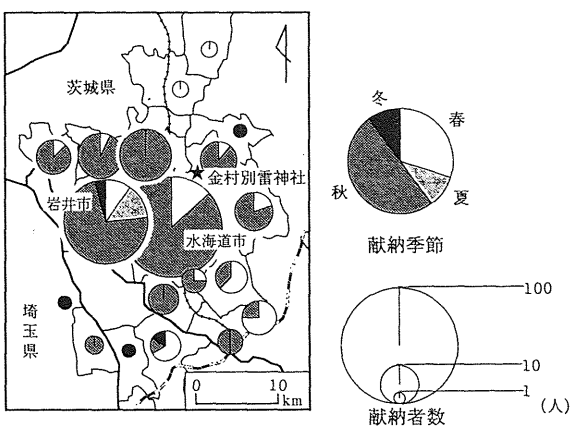
第６図　金村別雷神社・個人祈願者の分布（1995年）
（金村別雷神社社務所資料より作成）

圏の外縁部にかけて漸減していく傾向がわかる．個人崇敬者の分布域は講の分布域よりも広範囲に及ぶものの，金村別雷神社から外縁地域へかけて漸減している．分布の核心が金村別雷神社から10～30km 圏に位置する講と個人崇敬者の分布集積地域は合致していない．例えば，20講が分布する千葉県野田市の個人崇敬者数は31人であり，同様に21の講が分布する茨城県谷和原村では12人に過ぎない．

個人祈願者が最も多く参拝するのが冬季（12～２月）であり，全体の48％（495人）を占めている．これは元日を中心とする正月の参拝者が多いことに起因している．元日だけで348人と年間の個人祈願者数の34％を占めており，正月が個人祈願者の参拝の中心である．冬季の参拝者数は各地域で卓越しているが，なかでも氏子地域を含むつくば市豊里地区や谷田部地区といった小貝川左岸に位置する地域や神奈川県，東京都，栃木県といった個人崇敬者の信仰圏の外縁地域で高くなっている．

冬季に次いで参拝者数が多いのは秋季（９～11月）の279人（27.1％）であり，以下春季（３～５月）の196人（19％），夏季（６～８月）の61人（5.9％）の順となっている．秋季の参拝が多いのは，水海道市の74人，岩井市の47人，つくば市豊里地区38人，石下町30人の順である．また春季の参拝は岩井市の26人が最多であり，水海道市25人，つくば市豊里地区22人，伊奈町19人の順となっている．春秋の個人祈願者はそれぞれの大祭に合わせて参拝する例が多い．太々講や団体講の代参者が個人的に参拝していく場合もある．夏季の参拝者数は各季節中最少であるが，参拝者の祈願内容をみると交通安全，家内安全に続いて雷除祈願者数が９人となっている．雷除祈願者の分布をみると，三郷市，関宿町，猿島町など比較的遠方から参拝していることがわかる．

第７図は個人祈願者のうち産物献納者の分布を示したものである[20]．産物の献納は，農業神としての金村別雷神社に対する豊饒祈願と御礼参りの祈願の表出である．奉納される産物は白米および玄米が主であるが，カブ，鶏卵，タケノコなどの野菜類の奉納者もみられる．産物献納者は232人いるが，このうち173人（74.6％）は秋季に収穫感謝の奉納を行っている．産物奉納者の95％以上は茨城県内の居住者である．特に水海道市と岩井市に多く，この両市だけで全体の43.5％を占めている．こ



第７図　金村別雷神社・産物献納者の分布（1995年）
（金村別雷神社社務所資料より作成）

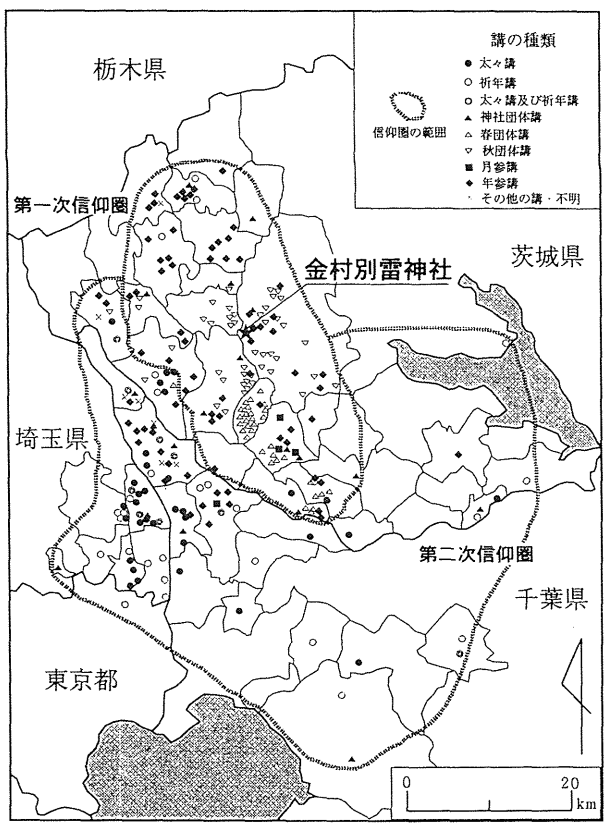
れに対し氏子地域を含むつくば市豊里地区の産物献納者はわずかに９人である．これは，氏子地域では秋大祭時に米もしくは金銭の奉納が義務づけられていることもあって，特別に産物の献納を行わないものと考えられる．

Ⅳ－３　信仰圏の地域区分

以上検討してきた金村講および個人崇敬者の分布を基に，金村別雷神社の信仰圏を地域区分すると次の二つに区分される（第８図）．

第一次信仰圏は金村別雷神社を中心に，北西方向から南東方向にかけての長径50km，短径20kmの紡錘形の楕円状を呈する地域である．茨城県西部から南部にかけての結城市，関城町，八千代町，千代川村，石下町，水海道市，つくば市豊里地区，同谷田部地区，伊奈町，谷和原村，藤代町，取手市などを含む地域が第一次信仰圏に該当する．

この第一次信仰圏は，団体講（特に春，秋団体講）と日月年参講の分布の集積地域であり，個人崇敬者の80％以上が居住する地域である．既往の研究で明らかにされてきた第一次信仰圏の有する空間的特性としては，青少年層の登拝および共同体的結合がみられること（出羽三山）や水神的性格（戸隠山），農耕に恵みを与える生産神としての性格（笠間稲荷）などが指摘されているが，こうした性



第８図　金村別雷神社信仰圏の地域区分（1995年）

格は金村信仰圏の場合にも看取される．

第二次信仰圏は，第一次信仰圏の主として南側に接する外縁部に位置する．茨城県西部の岩井市南西部，境町，茨城県南東部の河内町，東町，江戸崎町や埼玉県南東部および千葉県の北部の市町村を含んでいる．この第二次信仰圏は，太々講と祈年講の分布の集積地域である．個人崇敬者は少数で，講による代参者が同時に個人的な祈願をあげていく場合が多く，代参講による参拝が中心の地域である．既往の研究による第二次信仰圏の空間的特性としては，代参講の成立が指摘されており（岩鼻1983，松井1995ほか），金村信仰圏は既往の研究と合致するものといえる．

金村信仰圏において，第三次信仰圏を画定することはできなかった．第三次信仰圏は従来，分霊社の勧請や同行仲間型（総参型）の講の成立および，第二次信仰圏と比較して信仰者の分布密度の減少が指摘されている（岩鼻1983，松井1995）．しかしながら金村別雷神社の場合，分霊を勧請する方式はなく，また総参型の講（神社団体講）の分布がほぼ第二次信仰圏に一致するため，第三次信仰圏は成立しなかったものと判断できる．

V おわりに

以上本論文では，金村信仰の形態およびそれらの分布を検討することを通して，金村信仰圏の地域区分を行った．第2表は，金村信仰圏を既往の研究成果と比較し，その空間的特性を整理したものである．筆者は別稿で，各宗教の信仰圏に関する事例研究は未だ十分ではなく，また各宗教間の比較もこれからの課題となっていると指摘した（松井，1993）．しかしながら近年では，個々の事例研究が蓄積されており，それら蓄積されてきたモノグラフを比較検討すべき時期が来ているといえる．ここでは金村信仰圏と既往の信仰圏研究の比較検討を通して，信仰圏の空間構造に関する普遍性の抽出を試みたい．

第2表　信仰圏の空間的性格の比較

		岩木山	大山	出羽三山	戸隠山	笠間稲荷	金村別雷
I	距離	0～20km 圏	0～50km 圏	0～50km 圏	0～50km 圏	0～50km 圏	0～50km 圏・
	特徴	初参り5歳以下 高頻度の参拝	農耕守護神的性格 死霊鎮座的性格	青少年層の登拝 共同体的結合	徒歩1日行程 水神	農耕神 産物献納者の分布	農耕神 産物献納者の分布
II	距離	20～30km 圏	－	50～150km 圏	50～150km 圏	50～150km 圏	20～100km 圏‥
	特徴	初参り10歳前後 中頻度の参拝	修行霊場的性格 御師の配札活動 代参講の成立	成年層の登拝 代参講の成立	水神 作神・農耕神 代参講の成立	個人祈願者の分布 同行仲間型の講の成立 分霊勧請者の分布	代参講の成立 同行仲間型の講の成立
III	距離	30～75km 圏	－	150～350km 圏	150～350km 圏	150～800km 圏	－
	特徴	初参り15～20歳 低頻度の参拝 模擬岩木山への参拝	勧請神的性格	老年層の登拝 同行仲間型の講の成立	信仰の分布の希薄性	信仰の分布の希薄性 分霊勧請者の分布	－
資料		小山（1995） 金子（1997）	鈴木（1986）	岩鼻（1983）	岩鼻（1992）	松井（1995）	－

・ 信仰圏は短径20km，長径50km の楕円型を呈する．

‥ 第一次信仰圏の南側外縁部に広がる．

第２表からも明らかなように，日本の山岳宗教の場合，信仰中心地からの距離に応じて，信仰形態の地域的差異がみられ，その差異に基づいて複数の信仰圏が設定されうる[21]．古来より日本人は山岳に神聖性を抱いてきたが，それは山自体が神として崇められ，神々や祖霊の居住地として，また宗教者の修行場として山が人々の間で信仰されてきたからに他ならない．もともと精緻な信仰体系や教義を有さない山岳信仰は，山容を眺望できる山麓居住民の信仰対象として，崇敬されたものであり，各山岳信仰における第一次信仰圏の範囲は，いずれもこの山岳周辺域を示している．山容の秀麗さやその規模，独立性などの条件によって異なるものの，遥拝可能で徒歩一日圏内に位置する第一次信仰圏では，水を支配し，作物の豊凶を占う農耕神としての性格が顕著であり，あわせて祖霊の憩う地でもある．信仰は，共同体の社会組織と結合し，社会的な通過儀礼としても利用される．この第一次信仰圏にみられる信仰形態は，日本におけるアルカイックな信仰の表出したものであり，多くの里山でみられる普遍的な信仰形態であると考えられる．笠間稲荷や金村別雷神社のような非山岳信仰の場合にも，産物献納者の分布がみられる農耕神的な性格が顕著な地域である．金村信仰の場合にも，第一次信仰圏に卓越する日月年参講の主目的が道切りであることや，団体講が集落内の社会組織と結合していることから，山岳信仰にみられる守護神的性格や共同体的結合といった性格も指摘されよう．

第二次信仰圏の成立には，信仰の普及伝播者（布教者）の果たす役割が大きい．多くの山岳宗教の場合，御師の配札活動に依拠した代参講が組織され，山岳はその霊験を基盤とした御利益によって，直接眺望することができない地域の人々と結合する．第二次信仰圏に属する地域は，第一次信仰圏のそれと比較して，山岳との直接的な関係は薄れるものの，集落の社会組織とは独立した信仰を媒介とする組織が生まれ，定期的・周期的な参拝が営まれるといった特徴が指摘できる．金村信仰の場合，代参講と同時に総参型の同行仲間講が組織されている．雷除・嵐除・祈雨といった雷神本来の御利益に特化した神社と地域の結びつきがみられる一方で，余暇活動的な要素を含有する総参型の講が分布する地域となっている．

信仰圏の最外縁部に位置づけられる第三次信仰圏の成立は，当該信仰の有する宗教的な力の大きさと関連している．より強力な布教者の存在や信仰組織の様態に影響されるものと推察される．いずれの場合にも，信仰の分布は希薄かつ分散的となり，信仰を受容した地域が飛地的に分布する．第三次信仰圏が有する信仰形態の中でもっとも顕著な空間的特性を示すものは，聖なるもののの代替物（分霊，模擬山，太刀など）に対する信仰がみられる点である．遠隔地に位置する地域では，定期的・周期的な参拝が困難となり，代替聖地への参拝や勧請といった宗教行動が行われる．金村信仰の場合に第三次信仰圏が確認されなかった理由の一因には，金村信仰の根幹をなす雨乞い儀礼が，神水の授与という直接的な呪術的行為に基づくものであったため，遠隔地では御利益を得ることが困難であることという点が指摘されよう．

以上のように，これまで主として論じられてきた山岳宗教の信仰圏には，その空間的特性に共通点を看取することができる．日本における信仰圏研究を時代区分すれば，宮田による仮説的な信仰圏設定に始まり，民俗学的なモノグラフが蓄積された第１期（1960年代～80年代前半）と空間構造に視点が向けられた岩鼻（1983）による出羽三山信仰圏の研究以降の第２期（1983年～）に大別される．信

仰圏を地域区分する試みや，その形成過程に関する研究には一定の成果がみられる．今後は，この信仰圏の差異がもつ空間的意味を明らかにしていく努力が求められよう．すなわち，信仰圏が地域分化を生じる理由やその意味が問われなければならない．日本の宗教の場合，欧米のキリスト教の宗教伝統とは異なり，複数の宗教が個人や集落を単位に信仰されており，複数の宗教の重層的な分布構造を分析することが必要であろう．日本では，ある地域がある特定宗教の信仰圏のみに属している場合は異例である．A地域はA宗教の第一次信仰圏であると同時に，B宗教の第二次信仰圏であり，C宗教の第三次信仰圏に属しているという場合も多いことが予期される．信仰圏研究の意義は，宗教的な空間構造の解明であり，それは同時に日本社会における宗教の特質を解明することにもなるのである．

本研究を行うにあたり，金村別雷神社宮司・所　弘司氏をはじめとする金村別雷神社の関係者の方々には，大変お世話になった．本論文は，1998年1月に筑波大学に提出した博士論文第Ⅱ章の一部に加筆修正したものである．現地調査と報告のとりまとめのために，平成10年度文部省科学研究費補助金基盤研究（C）(2)「持続的農村システムにおける女性の役割に関する地理学的研究」(代表者　田林　明，課題番号　09680152）と平成10年度筑波大学学内プロジェクト奨励研究（準研究員）「地方中心都市における住民の生活行動に関する地理学的研究」（代表者　松井圭介）の一部を利用した．

注

1）雷神社の名称を持たない神社の中にも，例えば賀茂神社のように雷神を祭神として祀っている神社はあるが，本稿では対象に含めない．

2）創建の縁起が不明の神社が多い中で，県南東部にある麻生町の岡集落に祀られている雷神社（番号20）には，次のような縁起が伝えられている（茨城県神職会，1930）．

「元文元年（1763年筆者注）九月一五日の夜，大風雨迅雷民家に震ふ．邑人其跡に椿樹一株を栽え之を記し更に祠宇を営建して別雷神を祭祠す．其震日なるを以て毎年九月一五日祭典を挙ぐといふ．」

3）板倉雷電神社（群馬県板倉町），別雷皇太神（茨城県水戸市）とともに，関東三雷神と呼ばれている．

4）春の大祭は「お雷まち」とも呼ばれ，赤飯や草餅を作った崇敬者が参拝し，夏の雷による恵みの雨を祈願する祭りである．1992年までは旧暦で行われていた．秋の大祭は収穫感謝祭であり，新暦11月23日に行われている．

5）新暦1月1日に行われる新年の予祝祭事であり，第二次世界大戦以前までは旧暦で行われていた．

6）最後に行われた祈雨祈願は昭和30年代の前半であった．

7）縦が約40cm，横が約8cmほどの紙製の札である．

8）ここで個人祈願者とは，金村別雷神社の拝殿に昇殿し，神主によりご祈祷を受けた祈願者を指す．

9）ここでいう金村講とは，1949年11月の御神殿屋根修繕費奉納者芳名額に記載されている郵便祈年講である．郵便祈年講とは，旧暦元旦に参拝もしくは郵便で神札の授与を受ける講であり，現在の祈年講に相当する．しかしながら，第二次世界大戦前までは，現在ある4種類の講のうち相当数が重複しており，ほぼ郵便祈年講の分布から，当時の金村講の分布域の推定が可能である．

10）1949年における金村講の分布を1997年4月現在の市町村別に集計すると，千葉県野田市の25講が最多であり，以下埼玉県吉川市19講，同三郷市17講，同越谷市と千葉県柏市の10講が続いている．

11）金村別雷神社の講社名簿は，1985年に改訂されているが，1984年以前の講社名簿は廃棄されている．したがって，この講社名簿に記載されている全講社を1985年時点で存在が確認されていた講とする．

12）講が組織されている集落は320であるが，複数の形態の金村講が組織されている集落があり，講種別の数値はそれぞれ別個に集計した．講の総数は346である．

13）春団体講，秋団体講の参拝時期は，神社側の都合で決められたものである．

14）ここで1995年現在の講とは，1993年から95年の間

に最低一回は金村別雷神社に参拝している講を指す.

15) 神社に奉納された棟札などから推察すると，関東大震災以前には現在の東京都下にも講が多数立地していた.

16) 1995年時点での金村講分布の最遠隔地は，茨城県大子町の祈年講である．形態は祈年講であるが，現在では講員はおらず講元一人が神札の授与を受けている.

17) 金村別雷神社への信仰の基盤である祈雨祈願は，神水の授与を伴うこともあり，街道や河川による交通の利便性は重要である.

18) ここで祈祷を受けた人とは，金村別雷神社の社務所にて祈祷の申し込みを行った人を指す．通例では昇殿し，神主によりご祈祷を受ける.

19) ここでは居住地が判明している祈願者のみのデータである.

20) ここでいう産物献納者とは，農作物の献納者を意味する．一般の個人崇敬者による日本酒の献納などは含まない.

21) 流行神的な信仰は事例（笠間稲荷）が一例しかないため，一般化は困難である．また多くの新宗教のような創唱宗教の場合には，信仰の地域差が小さいことが予期される.

参考文献

井之口章次（1985）：『筑波山麓の村』名著出版，252p.

茨城県神職会（1930）：『茨城県神社誌』茨城県神職会，189p.

茨城県総務部総務課（1989）：『茨城県宗教法人名簿』茨城県，209p.

岩鼻通明（1983）：出羽三山信仰圏の地理学的考察．史林，**66**，681-726.

岩鼻通明（1992）：戸隠信仰の地域的展開．山岳修験，**10**，31-40.

上田正昭編（1988）：『天満天神』筑摩書房，216p.

小山隆秀（1995）：模擬山習俗からみた岩木山信仰 ― 信仰圏の設定をめぐって ―．日本民俗学，**203**，1-22.

金子直樹（1995）：日本における信仰圏研究の動向 ― 山岳宗教を中心にして ―．人文論究，**45**，104-117.

金子直樹（1997）：岩木山信仰の空間構造 ― その信仰圏を中心にして ―．人文地理，**49**，311-330.

鎌ヶ谷市郷土資料館編（1993）：『鎌ヶ谷市郷土資料館調査報告書Ⅲ　鎌ヶ谷の民間信仰』同発行，11p.

串田全男（1978）：『上郷史資料考』上郷史資料考刊行会，330p.

倉林正次・黒川弘賢・坪井洋文（1971）：利根川流域における神社信仰の特徴．九学会連合利根川流域調査委員会編『利根川 ― 自然・文化・社会 ―』弘文堂，390-410.

田村善次郎（1972）：雷．大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂，169p.

豊里町史編纂委員会（1985）：『豊里の歴史』豊里町，249p.

松井圭介（1993）：日本における宗教地理学の展開．人文地理，**45**，515-533.

松井圭介（1995）：信仰者の分布パターンからみた笠間稲荷信仰圏の地域区分．地理学評論，**68A**，347-348.

宮田　登（1994a）：共同祈願．大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂，200-201.

宮田　登（1994b）：個人祈願．大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂，257-258.

宮本袈裟雄（1994）：祈願．小野康博他編『日本宗教事典　縮刷版』弘文堂，659-662.

吉野正敏・宮内誠司・岩間敏彦（1987）：関東甲信地域の降ひょうとひょう害：その分布特徴とその時の大気構造．農業気象，**43**，239-246.

吉野正敏・宮内誠司（1987）：関東甲信地地方の降雹特性．筑波の環境研究，**10**，113-123.

八千代町史編纂委員会編（1987）：『八千代町史　通史編』八千代町，1274p.

柳田国男（1969）：雷信仰の変遷．柳田国男『定本柳田国男集第九巻　新装版』筑摩書房，63-81.

Regional Characters of Kanamura Betsurai Shrine Faith

Keisuke MATSUI

The purpose of this paper is to clarify regional characters of the sphere of Kanamura betsurai shrine (Kanamura for short) faith. Kanamura locates in Tsukuba city, Ibaraki prefecture, and Kanamura faith has been accepted mainly in rural area in the southwestern Ibaraki, the southeastern Saitama and the northeastern Chiba prefecture.

To achieve this purpose, the author indicates general view about a character of thunder faith on the basis of Kanamura faith. The location and history of Kanamura will be described after that. Next, the distribution of both religious associations (*ko*) and believers will be described, and the sphere of religion of Kanamura will be illustrated.

Though the origin of Kanamura association is not clear, it is supposed to be organized around the latter Edo or the Meiji era. Kanamura association is organized in a rural community. There are four types as follows.

(1) *Daidai-ko*: It is an association for making an offer of sacred dance at the spring and fall festival. Originally, the association needed to visit Kanamura twice a year at both festivals. Recently, the frequency of visit is decreasing, not a few associations visit there once a year. Each member of the associations visits Kanamura by turns.

(2) *Kinen-ko*: It is an association to pray for the New Year. A form of this typed association is not to visit Kanamura directly but to get some amulets for each member by mail. Some of the *kinen-ko* have changed from *daidai-ko* on account of declining in faith derived from farmar's decreasing.

(3) *Nichigetsunenzan-ko*: It is an association to visit Kanamura daily, monthly or yearly. There is no association that visits daily now. The association whose frequency is once a month (called *tsukimairi-ko*) usually visits Kanamura from March through September.

(4) *Haruaki dantai-ko*: It is an association to visit Kanamura once a year, mainly in April or November. There are three types in this association. One of them is called shrine group assosiation (*jinjadantai-ko*). The character of this type is to visit Kanamura with all members of the association (*somairi-ko*). Some of them were organized before the Meiji era. Remaining two types are classified by the time of visit. One is called the spring association (*haru-ko*) and the other is the fall association (*aki-ko*).

The author illustrated the distribution of Kanamura associations in 1995 (Figure 5). There are 254 Kanamura associations in four prefectures, Ibaraki, Chiba, Saitama and Tokyo. Ibaraki has 175 (68.9%), Chiba has 50 (19.7%) Saitama has 28 (11.0%). The number of Kanamura association has been decreasing year by year. Especially, urbanized region in Chiba or Saitama decreased the most. The subject of this paper is these 254 Kanamura associations in 1995.

According to Figure 5, it is appeared that the distribution of Kanamura association is dense in the southern or western part, mainly in 10 to 30 kilometers zone from Kanamura. The outermost region of the distribution is about 50 kilometers zone from Kanamura. There is no Kanamura association father than this zone.

The numbers of believers are 1031 in all. There are seven prefectures (Ibaraki, Chiba, Saitama, Tokyo, Tochigi, Kanagawa, Aichi and Nagano) that have believers. Believers living in Ibaraki amount to 878, and occupy 85.2 percent. The distribution of believers is different in each region. Toyosato district in Tsukuba city has 273 and is top. More than two-third of believers (182 persons) in Toyosato district live in *ujiko* region. Mitsukaido city is next and has 155. Iwai city has 107 and Yatabe district in Tsukuba city has 62. The number of believers is decreasing gradually to the outer area, and a distributional area of believers is wider than that of associations.

The author divides the sphere of religion of Kanamura into two regions based on the distribution of Kanamura associations and believers (Figure 8).

The first area is like an oval whose major axis is 50 kilometers and minor axis is 20 kilometers. It lies from the western to the southern part of Ibaraki prefecture, including Yuki city, Yachiyo town, Chiyokawa village, Ishige town, Mitsukaido city, Toyosato district in Tsukuba city, Yatabe district in Tsukuba city, Ina town, Yawahara town, Fujishiro town and Toride city. There are two spatial characters in this area. One is to have a lot of *dantai-ko*, especially, *haru-ko* and *aki-ko*, and *nichigetsunenzan-ko*, the other is to account for more than 80 percent of believers.

The second area lies in the outer zone of the first area, mainly extends to the southern. It includes the southwestern part of Iwai city and Sakai town located in the western part of Ibaraki, Kawauchi town, Azuma town, Edosaki town located in the southeastern part of Ibaraki, and around southeastern part of Saitama, northwestern part of Chiba. There are also two spatial characters in this area. First, most of *daidai-ko* and *kinen-ko* are organized in this area, second there are few believers dwelling in this area. Referring to believers, many of vicarious visitors pray for their private wishes, and they are counted as believers. It is appropriate to consider this area as a main area of *daisan-ko*. The author cannot establish the third area of it. It is pointed out that the spatial character of this area is an existence of *somairi-ko*, establishment of branch shrine, and thinness of religious associations' density (Iwahana, 1983; Matsui, 1995). However, Kanamura not having branch shrine system, and the distribution of *somairi-ko* being agree to the second area, there is not the third area in Kanamura.

This will lead us further into a consideration of universality of regional characters of religions. Compared Kanamura to other studies, we can find a common spatial structure in the sphere of religion in Japan. We may agree that the major result from recent investigations demonstrated the way of regional division and historical process of the formation. However, we can not help saying that unknown problems are remaining in this field. The author should point out that we have to ask the spatial meaning of each sphere of religion, that is, we have to ask the reason the areal differentiation has been caused or the meaning of it.

Key words: thunder faith, Kanamura betsurai shrine, Kanamura association, believer, sphere of religion

写真 1　金村別雷神社遠景
小貝川左岸に鎮座する金村別雷神社は，931（承平元）年，豊田家初代領主・豊田将基によって，京都・賀茂別雷神社の分霊を勧請して創建された旧郷社格の神社である．小貝川の氾濫原に立地し，祈雨をもたらす神，水を治める神として，農村地域を中心に信仰が受容されていった．

写真 2　金村別雷神社・春大祭の風景
春大祭は，別名「お雷まち」と呼ばれ，旧暦３月15日に行われる豊作祈願祭事である．太々講，春団体講の世話人，講員をはじめ近隣の人々が多数参拝し，家内の安全や豊作を祈願する．現在では新暦４月第３土・日曜日に行われており，参道には露天商も多数出店し，参拝者でにぎわう．

写真 3　金村別雷神社境内にある井戸
境内北側の一角にある井戸で，1960年代まで儀礼に利用されていた．雨乞いの際には，集落の世話人が１～２尺の大きさの竹筒をもって金村別雷神社に向かい，神社でご祈祷と神水を授かり，集落に帰還した．金村別雷神社のもつ聖性の象徴であるが，現在では利用されてはいない．

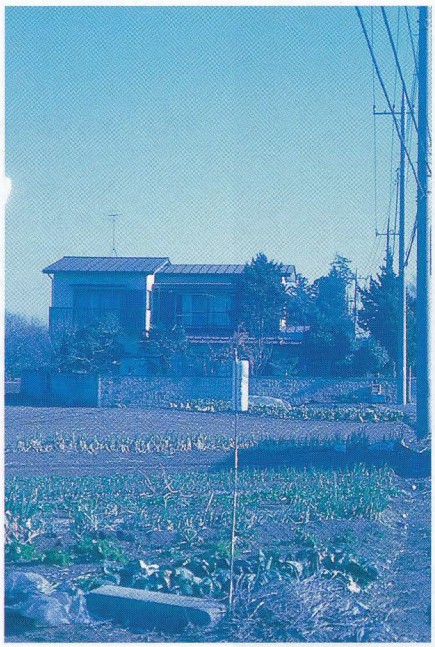


写真 4　道切り用に立てられた大札
大札は主として辻札として利用される．高さ 1 m50cm ほどに切った細竹の上部に大札をはさみ，集落の主要な出入口に立てられる．写真はつくば市豊里地区の集落で，ここでは日月年参講が組織されている．

写真 5　昇殿祈願者による参拝の様子
社務所で申込みをした祈願者が拝殿でご祈祷を受けている．拝殿内にみえる額や幟，太鼓などはいずれも講社から寄贈されたものである．写真は1999年の元旦祭当日の様子である．

写真 6　金村別雷神社・鳥居前町跡
金村別雷神社の参道沿い約250m にわたって，近世後期から鳥居前町が形成されていた．神官宅，宿泊施設，飲食店，土産物店などが立ち並び，第二次世界大戦前は，活況を呈していた．1960年代に小貝川の堤防改修工事が実施され，当地区は500m ほど東の堤防外地区に移転した．現在では空地となり，参拝者用の駐車場として利用されている．